名所物見の旅　其の六拾　上高地から穂高岳へ①

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

四十一年前の上高地

車窓から見える沢沿いの集落の屋根に、川原で拾ってきたような石がたくさん載っている。物珍しく眺めていると、道は次第に傾斜を増して、バスは長い急坂をあえぎながらのぼっていった。トンネルを抜けると突然大きなダムが現れ、車内から大きな歓声が上がる。車掌さんの解説によると、前年に完成したばかりの奈川渡ダムだという。

大正池にその姿を映す新雪の穂高連峰。日本を代表する山岳景観を誇る上高地には、年間150～200万人の観光客や登山者が訪れる。

昭和四十五年（1970）夏、わたしは仲間七人とともに北アルプス穂高岳登山に参加し、松本電鉄新島々の駅前から乗ったおんぼろバスに揺られながら一路上高地へとむかっていた。バスは沢渡（さわんど）という集落に着くと、オーバーヒートを防ぐ為の休憩となった。土産物屋の店先には、冷たい沢水を引いた桶に缶ジュースや青リンゴが冷やされている。青リンゴは一個五十円。少ない予算から一人五十円の出費は痛いが、食い意地の張ったわれわれに我慢することなど不可能で、収穫したばかりだという旬の青リンゴをさっそく買ってかぶりついた。青リンゴはちょっぴり酸っぱくて歯ごたえがあった。

道路脇に「白骨温泉→」と墨で書かれた古びた木の看板がある。われわれは「“ハッコツオンセン”とは恐ろしそうな温泉だなぁ」と話しあった。ほんとうは「シラホネオンセン」と読むのだが皆知るよしもなく、意地悪な先輩から「この辺は温泉を掘るとハッコツ（白骨）がたくさん出てくるのだ」と嘘話を聞かされ、気味悪い温泉を想像してますます怖くなってしまった。

休憩を終えて出発すると、そこから道路は未舗装のガタボコ道となり、座席のわれわれは何度もバスといっしょに大きく弾んで、居眠りすることも出来なくなった。噂の釜トンネルの手前では、交互通行の為に散々待たされ、バスはやっと走り出した。驚いたことにトンネルの中は急な坂道で、地下水が流れひんやりとして薄暗い。バスはローギアーでエンジンを唸らせながら進んでいった。なぜ“噂の”かというと、釜トンネルは遭難者の幽霊が出るという山岳関係者の間では有名な話があり、たわいもない噂に我らかわいい少年たちはビビリまくっていたのである。

釜トンネルを出ると切り立った険しい岩壁と深い谷が目の前に現れ、まさに深山幽谷に来たという感慨があった。やがてバスの先に大正池が見えてきた。大きな池には立ち枯れた木が文字通り林立している。なんでも大正四年の焼岳大噴火の際に梓川が堰き止められて池ができ、落葉松がそのまま立ち枯れて残ったのだという。引率のY先生によれば昭和三十七年の焼岳再噴火の土石流で池は半分埋まり、立ち木も大分減ったということであったが、それでも大正池の異観は驚きであった。

バスの終点河童橋に到着すると土産物屋や宿が軒を並べ、たくさんの観光客で賑わっていた。河童橋は明治二十四年に梓川を渡るための丸太の橋が架けられたのが最初で、その後明治四十三年に初代の吊り橋が架けられた。わたしが渡ったこのときの河童橋は昭和三十二年に架け替えられた三代目で、現在の河童橋は平成九年に架けられた五代目となっている。

小梨平の幕営

我ら登山隊は河童橋から5分ほどの小梨平キャンプ場に、二張りの大きな家型テントを張った。小梨平はとても素晴らしいところで、観光客で賑わう河童橋の喧騒が嘘のような静けさがあった。化粧柳が茂る梓川の清流には靄が立ち、落葉松の樹間からは穂高の稜線が一幅の絵のように見えている。穂高の峰々はいままでわたしが見てきた山とは高さがまったく違い、頭上にかぶさるように見えるのに驚いた。まさにアルプス一万尺という歌詞どおりの実感があった。

幕営が終了するとさっそくわたしたちは暗くならないうちに夕食を済ませるべく、なれない炊事に手間取りながらも支度を急がなければならなかった。初めての本格的天幕生活の初日は、穂高を目の前にしたカレーライスの夕餉という贅沢なもので、その光景は今でも忘れがたいものがある。夕暮れ迫る頃、夕食を済ませて食器の片付けに炊事場に行くと、全国各地から来た中高生らがそれぞれの洗い物を持って集まっていた。そのなかでもおじさんのような顔をした地元の高校生が、「お前ら新人か。穂高は雷に気をつけろ！三年前の松本深志の遭難知ってるだろ」と高校生11名が死亡した昭和四十二年の落雷による痛ましい遭難事故のことを昨日のように語り、「あの辺だったなぁ」と薄暗くなった西穂高の稜線を指差すのであった。おじさん高校生にさんざん嚇かされたわれわれは、山とは怖いところなのだとあらためて認識させられ、無言でテントに引き上げた。その夜は山に対する畏れで、寝袋に入ってから誰ともなく登山に対する不安を声をひそめて話しはじめ、皆なかなか寝付かれなかったのである。

翌朝、あまりの冷え込みに目覚めたわれわれは、真夏だというのに、まるで晩秋を思わせる寒さに震え上がった。稜線の中腹にはガスがかかり、穂高連峰はますます高く大きく見える。昨夜の不安もすっかり忘れ、明日はあの高峰の頂に立つのだと思うと弥が上にも気持ちは昂ぶり、大きなキスリングザックを担いで今日のキャンプ地涸沢に向け、第一歩を踏み出したのであった。

上高地の今昔

梓川上流の谷に広がる平地を「かみぐち（上口、上口地）」と呼ばれていたことが古文書に載っており、これが上高地の記録の最初のようだ。享保年間に松本藩の手によって編纂された「信府統記」の穂高神社縁起には「上河地トイヘル所ナリ」と記録されており、それが「上河内」「神河内」となって、いつの間にか「上高地」と宛て字された。上高地は明治時代になると夏の間の放牧がおこなわれるようになり、もっぱら鍋冠山や徳本峠（とくごうとうげ）越えの道が使われていた。日本の登山黎明期に活躍し、日本アルプスの名付け親である大阪造幣局鉱山技師ウィリアム・ガウランドや宣教師ウォルター・ウエストンも徳本峠を越えて上高地に入っている。ウェストンは「日本アルプス－登山と探検」の著作で英国に上高地をはじめ日本アルプスを紹介し、日本アルプスはウェストンによって一般の日本人よりも先に英国人の知るところとなった。いまでも徳本峠の道はウエストンゆかりの古典的ルートとして、静かな山旅を好む人たちに人気がある。

河童橋にて（昭和四十五年八月撮影）。この河童橋は昭和三十二年に架け替えられた三代目で、現在の五代目に比べると簡素な造りで、幅も狭かったように思う。

日本のアルピニズム発祥の地となった上高地は、やがて純粋なパイオニアだけの世界ではなくなり、明治の末ごろには温泉宿も建ち一般客も集めるようになっていく。「スウィス日記」の辻村伊助が「神河内は、林道が直線に貫かれてから、河童橋が田舎臭い釣橋に変わってから・・・茶碗に温泉名が焼き付けられ、手拭が間違いだらけの横文字で染められて、温泉は『上高地』という名と共に、しかく俗化してしまったのである。・・・くれぐれも言う、神河内ならぬ『上高地』は、不快なところである」と嘆いたのは大正元年のことであった。俗化されたことによって、上高地はわたしたちにとって身近な世界になったといえるが、明治大正を生きた辻村が近年の上高地の喧騒を見たら、卒倒してしまうに違いない。（三宅修「上高地・槍・穂高」参照）

現在のように野麦街道から上高地へのルートが一般化するのは、大正十三年に手掘りの釜トンネルが完成してからで、昭和八年に大正池、同十年には河童橋まで乗合いバスが運行されるようになった。上高地に帝国ホテルが開業した翌年の昭和九年には国立公園に指定され、第一級の山岳観光地としてのスタートを切った。以来七十有余年、大正池や梓川を前景とした穂高連峰の雄大な山岳風景は日本を代表する景観として、一度は訪れてみたい日本人の憧れの地となっている。

変わり行く上高地

初めて穂高に登った五年後の昭和五十年にふたたび上高地を訪れたとき、その年の集中豪雨によって大正池に大量の土石流が流れ込み、池は埋まり立ち木もかなり流されているのをまのあたりにして、土砂災害の凄まじさに驚かされた。その後上高地を訪れるたびに大正池の立ち枯れの木はどんどん少なくなって寂しく思うが、毎年ダンプ三千台分の土砂を浚渫してなんとか大正池自体は景観を保っている。土砂による景観の変化は自然の摂理としてどうしようもなく、この上流に田代池という美しい湿原があったが、いまでは土砂に埋まり川となって昔日の面影を失ってしまった。大正池もふたたび豪雨や噴火による大きな土砂崩れが襲えば、広い川原になってしまうのだろう。

“噂の”釜トンネルも平成十七年に新釜トンネルが開通して、暗い湿った手掘りの旧トンネルから広く明るい近代的なトンネルに変わり、これでは怪談の出番などどこにもなくなってしまった。

（続く）

大正四年に大噴火を起こした焼岳とその名残りの立ち枯れの木。年々その数が減っていくのは寂しい限りである。

上高地は落葉松が美しく、十月になると梓川沿いの落葉松は一斉に黄葉して、いっそう華やかな風景を見せてくれる。